

オープン カレッジ

東京パラリンピックまであと1年を切った。障がい者スポーツへの注目のみならず、さまざまな分野のバリアフリー化促進への期待が高まる。放送の世界では、人気番組に手話をつけて放送する「手話放送プロジェクト」が目を引く。

デジタル放送開始から約8年、字幕サービスは今や当たり前だが、字幕放送は1985年にドラマでスタート。2000年にはニュースの「生」字幕へと進展し、音声自動認識技術のもと、紅白歌合戦や五輪中継にも取り入れられるようになった。ただし、これらの

番組制作に見る新たな挑戦

限界を補うため、話者が顔や体をいっばいに使って表現できる手話番組が登場する。最古参の「NHK手話ニュース」は1990年に始まっている。

これに対し本プロジェクトが目指すのは、聴覚障がいのある人もない人も、ともに楽しめる放送だ。発想の原点は、2012年ロンドンパラリンピックに向けたイギリスの取り組みだ。英国内の放送権を獲得したチャンネル4で、大会放送を推進したA・ロウクリフ氏の講演を3月に東京で聴いた。過去最大の視聴促進キャンペーンが功を奏し、英国民の7割近い4千万人が放送を見たとのこと。

特に力を入れたのは、パラリンピックへの理解を深める番組づくりとともに、

い者理解を深める契機となった。

NHKでも公募・育成した障がい者リポーターが、パラアスリート取材を通して画面で活躍し始めている。ゴールは英国のような障がい者向けのみでなく、一般番組でも障がい者が自然に当たり作ったりすることだが、手話放送プロジェクトはそこに至る過程のアクションだ。監修や手話通訳がろう者なら、自らも難聴のディレクターが手がけた番組の一つが、一人芝居で昔話を語りかける「おはなしのくに」。マルチお笑いタレントの渡辺直美扮する「きんたろう」と、妖艶な雰囲気魅力の壇蜜による「つるのおんがえし」の2本は、いずれも演者独特のキャラが存分にいかされた作品だ。その中に「手話語り」がストーリーに合った衣装で映り込み、自らも主人公として演じ伝える。音楽や効果音を専門に表現するろう者も登場し、手話と小道具を組み合わせる演出を凝らして音を可視化する。さらに、画面中の彼らの位置やサイズ、タイミングなど通常番組とは異なる苦労を経て、イメージは共通でも違う楽しみ方を皆が一緒にできる別作品が誕生した。

パラリンピック開催やこのような挑戦は、差別のない社会を目指すはるかな道のりの一歩に過ぎない。メディア自身もその可能性を模索して、改革の真つただ中で必死に闘っている。

「手話放送プロジェクト」は 社会を変えるか

手法ではスピード感、その場の雰囲気やニュアンスを伝えることができない。そこで、この文字メディアの



山女学園大学
文化情報学部教授
檀山

脇田 泰子

わきた・やすこ シャーナ
リズム論、メディア論。東京
大学教養学部教養学科。19
60年生まれ。